



熊本支部報

日本山岳会熊本支部

No. 6 平成7年3月31日
 発行 日本山岳会熊本支部
 熊本市二本木3丁目3-8
 (田上敏行・気付)
 電話 (096) 324-1200
 編集 本田誠也・広吉 功
 印刷 (有)みうら企画
 熊本市清水町山室50-80

・支部長随想..... 1	・会員消息..... 22
・会員随想..... 2	・後記..... 22
・会務報告..... 19	

山の数をかぞえる

支部長 本田 誠也

今西錦司先生の山の随筆の中に「山の数をかぞえる」という一文があります。これを書かれたのは1946年ですから、今西先生44才のころになります。内容からみると随分老成した感じを受けますが、「初登山に寄す」で著名な「山岳省察」にも、当時40才の自分のことを“老兵”と呼んでいるので、あの時代の人たちの年齢感覚ではそんなものかと思えます。この時、過去20年あまりで登った山の数が約250、これから登ろうとする山の数も丁度250位あるので、一生かけて500座の山に登ることを一つの念願としようと考えられたそうです。しかし「五百山踏破を願うピークハンターは、もし条件さえ許すならば、ついには千山踏破を願ったかも知れない」と書かれているように、その後20年かけて66才の時には、500山の目標を達成されました。10年後76才で1000山、そして何と7年後の1985年83才の時、1500山の大記録を達成されたのです。正統派登山と決別したピークハンターであっても「山の数をふやさんがために、数の奴隷となって山へ登るのではなく、数ある山の中からあらかじめえらんでおいた山へ登るのであれば」と注釈がついていますが、最晩年のころは数をふやすために幾分こだわりを

持たれたようでした。1983年秋に薩摩半島の山に登られた時など、予定外に3山を追加して「ハシゴ酒かなにかしらんが、これだけたくさん登らしていただければ満足です」と礼状を頂いたこともあります。私は近來とみに物覚えが悪くなり、いや物忘れがひどくなったというべきでしょうか、否応なく心身の退化を感じています。その私にとって、このような大先達の記録に迫ることは及びもつかないことです。1991年春のマッキンリーと、1993年夏のカナディアン・ロッキーではトレーニング不足とはいえ無様な挫折を経験しました。限られた人生のなかで、無原則な山登りを続けていることに、些か疑問を持つようになりました。このあたりで越し方の山登りを振り返って見ようと思ったわけです。今西流に私の山のしおりを捲って見ると、1945年の初登山から今日まで登った山の数は516座、1069回でした。このうちでは当然のことながら、大票田の熊本を含む九州が圧倒的に多く428座、973回になります。深田久弥さんの「日本百名山」では標高1500m、今西先生の1500山は、「山城30山」をいれるために標高400m以上となっていますが、私は登山行為として登った山は、すべてカウントし

ています。それにしても、在職中の中断があたにせよ、登りたい山がまだまだたくさんあるのに、随分少ない数のように思います。以上は、過去の山の数をかぞえたわけですが、これからは登りたい山の数をかぞえてみたいと思います。いつだったか、日本山岳会の会合の折に「恥ずかしながら私も日本百名山に登っているのですが…」と云われた方がいました。別に恥ずかしいことではなく、目標を立てて登ることは、ひとつの手法として良いことなので、私もやってみようと考えているところです。これは、今までそのつもりが無かったので、今度数えてみると33山に登っていることがわかりました。あと67山も残っているわけで、熊本からだと言隔の地が多いので大変です。しかし、きっちり計画を立てて5年以内には登りたいと思っています。海外登山は、かつてアフリカのケニア山に同行した久留米の脇坂順一先生の後追いで、パプア・ニューギニアのウイヘルム、メキシコのポボカテペトル、台湾の玉山、中国の太姑娘山、トルコのアララトに登りました。今夏はイランのデマバンドにでかけるつもりですが、あとは多少息切れ(金切れ)の気味があるので、体力造りと並行して考えたいと思っています。登りたい山がそれこそ“山ほど”あるので困った(楽しい)ものです。

心にのこる山旅

和仁古昇

いつも新年を迎えると、前年に登った山の数を数えることにしている。昨年は72山登ったので、5日に一回は行ったことになる。そのうちで、特に心にのこる山旅のいくつかを記してみたい。

熊本支部春季例会 大崩・五葉岳(1570m)

3月12日、日之影町見立の「あけぼの荘」に集合、宿泊し、翌3月13日、日隠林道を経て五葉岳に登った。そしてお姫山(1550m)化粧

山(1450m)と縦走したが、このコースの樹木の美しさは圧巻。永く記憶に残るほどの素晴らしさであった。

対馬の山、有明山(558m) 白岳(519m)

かねての懸案だった対馬の山、山溪の九州百山にのっている、有明山と白岳に登った。

4月26日、博多から対馬行きのフェリーに乗る。4時間半で厳原に着いたが、その日は町内の万松院や厳原八幡宮を廻り、民宿に泊まる。翌27日、タクシーで白岳登山口へ。約一時間歩いて白岳大明神の鳥居に着いた。お参りに登って来ていた地元のお婆ちゃん達の話では、このお宮は木曾の御岳さんの末社であるという。山頂には10時35分に着いたが、三角点は別のピークにあるとのことで、いったん鳥居まで下って登り直す。あまり登られていないのかルートが判り難く、地図を見たり、目印の赤テープを探したりしてやっと辿りついた。二等三角点が置かれたこのピークからの眺めは、360度にわたり素晴らしかった。同行3名で万歳三唱する。翌日は有明山に登るため、登山口の八幡宮横まで民宿の車で送ってもらう。7時35分に歩き出し、9時15分にはなだらかな草原状の有明山の頂に着いた。ここは、対馬下島唯一の一等三角点の山であり、展望もまた素晴らしい。空は晴れ、暖かな日差しがふりそそぎ、この上ない幸せを感じるひとときを過ごす。高々と万歳三唱して山を下った。

尾瀬行 至仏山(2228m)に登る

熊本記念植物採集会の例会で尾瀬に行った。

7月25日、参加者21名は熊本から空路で東京羽田を経由し、関越観光バスを乗り継いで、15時には尾瀬ヶ原の入り口、1615mの鳩待峠に着いた。夕食前のひととき、アヤメ平の方角へ向けて散策する。オオシラビソ、ダケカンバ、ブナなどが立つ山道の両側には、美しいチシマザサが群生していた。翌26日は、早朝6時に山荘を出て至仏山に向かう。9時30分に小至仏山を越えて、10時25分、2228mの至仏山頂に着いた。二等三角点の標石が、無

残にも倒されていたのはショックだった。暫くは四囲の大展望を楽しむ。14時少し前、鳩待峠に下り着き、更に尾瀬ヶ原の山の鼻へ下る。15時40分、山の鼻小屋着。夜はビジターセンターで、尾瀬の植物などのスライドを見せてもらう。この日の行程では、たくさん山の花を見ることができた。主なものを列記してみよう。ジョウシュウオニアザミ、ツダヤクシュ、ヒオウギアヤメ、イワイチョウ、オニシモツケ、ヤグルマソウ、オゼソウ、ゴゼンタチバナ、ハクサンイチゲ、ウサギギク、チングルマ、タカネナデシコ、ハクサンフウロ、エゾシオガマ等々。27日早朝、山の鼻小屋を出て木道を歩く。竜宮小屋、弥四郎小屋を経て、正午過ぎ白砂峠で昼食をとる。14時50分、尾瀬沼の畔に立つ長蔵小屋に着いた。私にとっては11年ぶりだが、少しも変わっていないのに懐かしさがこみあげてくる。今日は一日お天気にも恵まれ、ゆっくり湿原を歩くことができた。周囲に広がる景色を眺め、足もとの草や花を見ながら、満ち足りた時を過ごした。木道の道すがら色々な花を見たが、なかでも、キンコウカの多かったのが印象的だった。ナガバノモウセンゴケに白い小さな花が咲くのを初めて見た。翌朝、早く起きて大江湿原へニッコウキスゲを見に行く。今年は開花が例年より早かったのか、既に花は過ぎて、実を結んでいるものが多かった。阿蘇のキスゲに比べると、大輪の花をつけているように感じた。湿原の奥の小さな丘の上に、平野家の墓地があると聞いて行ってみた。入り口に「ヤナギランの丘」と書かれた古びた木札が掛けられていたが、折しもヤナギランが、一面に花をつけていたのは印象的だった。墓地の手前に「武田久吉氏追慕之標」があり、“この下に武田氏の愛用品を埋める”と書かれていた。正面に平野長蔵、長英、長靖三氏の墓碑があり、その右後方に、女性の名前の墓碑が二つ立てられている。何と素晴らしい環境に置かれた墓碑であろうか。この大自然の閑寂の地に眠る尾瀬の先覚者を偲び、私は

黙々と立ち尽くした。尾瀬の主と云われた平野長蔵氏は、私より遥かに若い61才で亡くなられたが、坊主頭に顎ひげの“異相”の人で、たっつけ袴に振り分け荷物、一本歯の高下駄を履き、東京に行くときもそんな仙人スタイルだったという。短歌を詠み、時には学生たちと国政、社会を論じる熱血漢だったそうだ。自ら“尾瀬沼山人”と号し、『この地をして永久に、永遠に、幽寂を失わしむることなくして、独想し、思索し、冥想するの地たらしめよ。青年よ、赤き心よ、風光明媚なるこの湖畔に、大自然の美を享受せよ』と、叫んだ。去りがたい想いを抱いて、9時過ぎ長蔵小屋を立つ。三平峠を越え、一の瀬休憩所を経て13時、大清水着、バスで水上温泉へ。29日往路を熊本へ帰る。この尾瀬行は今振り返っても、本当に実り多い旅であった。尾瀬を再認識することができたと思っている。

「尾瀬は総べての人を、マナーのよいハイカーにしてしまう、不思議な所だ」という言葉を、何かで読んだことがあるがその通りだ。最後に腰折れを一つ

キスゲ咲く 尾瀬の湿原 仏眠る 昇

家族カナダ・ハイキング

工藤文昭

南米アンデスの貴婦人と呼ばれるチンボラソ(6,310m)は、エクアドルのほぼ中央に位置し、赤道直下でありながら雪と氷に覆われた高峰である。この山に一度は登りたいと以前から考えていたが、いろんな事情があつてのびのびになっていた。一昨年秋に東京の友人から誘いを受けたが、時期が遅く航空券が取れず一年延期することにした。その後チンボラソで雪崩による大量遭難があつたり、仲間の都合が折り合わなかつたりで、暫くは行けそうにない状況になった。それではと急に思い立ってカナダ行きを決めたのが、昨年6月に入ってからであった。これまで私は一人

で気儘に海外の山を歩き回っていた。その罪滅ぼし?に予てから一度は家族(妻、娘二人)を連れていくと約束していた。娘たちが今年しか夏休みに暇が取れないと言うので、すぐさま旅行業者に予約の打診をし準備に取り掛かった。

カナディアン・ロッキー家族ハイキングということになったが、慢性金欠病の私には4人分の負担は相当に應える。少しでも安くするために無い知恵を絞った。航空運賃の比較検討、現地ではコンドミニウムでの自炊生活、レンタカーによる移動等々。7月29日ソウル経由バンクーバー(大韓航空)、その日の内にカナダの国内線に乗り換えてカルガリーに到着。レンタカーで2時間、明るいうちにバンフに着くことができた。リゾートホテルは二階建ての豪華な造り、バス、トイレ、キッチンと必要な電化製品も全て揃っている。近くにスーパーもあり、快適な自炊生活が送れそうだ。

翌日は時差による疲れもあり、ゆっくり起きてミネワнка湖へ軽いハイキングに出掛けた。どこまでも澄んだ碧い水、エルクやマウンテンシープなどの動物も、人間を気にすることなく徘徊している。愛敬者のシマリス、小鳥の囀り、私たちはこの大自然の中で、森の住人たちと共生していることを実感し幸せだった。ミネワнка湖と連なるツウ・ジャック・レークから眺めるマウント・ランデル(3,030m)の山岳景観も素晴らしい。

*ヒーリー・パス(ハイキング)

バンフからサンシャイン・ピレッジ・スキー場まで約20km。駐車場に車を置き、トレイルヘッドの指導標に従いヒーリー・クリーク沿いに谷を詰める。両側は険しい斜面をラーチの森が稜線まで這い登り、足もとはインディアン・ペイント・ブラッシュやアーニカ(うさぎぎく)、フリーベン(あざまぎく)などの色鮮やかな花々が埋め尽くし、まさに花の谷である。トレイルは平坦でよく踏まれていて歩き易いが、アブや蚊の来襲には辟易した。携帯用の蚊取線香を、ホテルに置き忘れて来たのが失敗だった。カナダでは湿地帯やクリークを歩くとき、蚊取

線香は必携品である。グレイシャー・リリーの群落が広がるヒーリー・クリーク・キャンプ場まで一時間半。それから次第に斜面がきつくなるが、50分も登るとウエスタン・アネモネが咲き乱れるアルパイン・メドウ(高山草原)に出る。緩やかな道は、隙間も無い程に花で埋め尽くされ、まるで花の絨毯の上を歩いているようだ。登るにつれて展望が広がり、烏帽子型のマウント・アシニボイン(3,618m)を遠望する。15年前に登頂した当時を思い出し、旧知の友にあったような気分になり殊の外嬉しかった。花に酔いながら歩いているうちにヒーリー・パスに着いた。ここからの展望はまた一段と素晴らしく、ファラオ・ピークやポール・レンジの山々が、大きな氷河と様々な色合いの氷河湖を懐に抱いて、峠を取り巻いている。いくら眺めても飽きることのない大景観だ。しかし、ここもアブが多く追い立てられるように峠を後にする。駐車場まで2時間半位で下りついたが、こんなに広く多彩なお花畑を見たのは初めてであった。

*ウイルコックス・パス

コロンビア・アイスフィールドのシャーレから、東へアイスフィールド・パークウェイを3km程走った辺りにトレイル・ヘッドがある。北西に15分位針葉樹林の中を登ると草原帯にでる。ここから雪と氷の大パノラマが開ける。眼下にアイスフィールド・シャーレの赤い屋根が光り、目前にコロンビア氷河の大雪原やスノー・ドーム(3,460m)、アサバスカ(3,491m)、アンドロメダ(3,442m)などが連なり絶好の展望コースである。アサバスカ氷河の末端は、一昨年来た時(熊本支部カナディアン・ロッキー遠征隊)より幾分後退しているように見えた。その左手横には山頂まで僅かに130mを残して敗退したマウント・アサバスカが、再会を喜び語りかけてくるかのようだった。暫く見ているうちに今回はどうでも登っておかけねばと思った。フリーベンなどの花に埋め尽くされた、アルパイン・メドウは峠までうねるように続き、ビッグホーン・シープなどの野生動物も多く、

魅力溢れるコースである。1時間半も歩くと、道は平坦になりやがて峠に着いた。それから、マウント・ウイルコックス(2,892m)の取り付き辺りまで徘徊したが、こんなに自然と同居できる所は他にないように思えた。帰りは1時間程で駐車場に下り着いた。

*アサバスカ(リターンマッチ)

二年前の失敗を教訓に、深夜の3時に単独で登り始め、4時半には北面氷河に取り付いた。

雪面は固く締まり、スリップに注意してアイゼンをきしませながらぐいぐいと高度を上げる。陽が上がり、雪が腐る前にプラトールを抜けておかなければと、出来る限り飛ばした。

■ 頂上に立ったのは7時半。15年前に初めてこの山に登った時も一人だったが、どうも単独行は私には向かないようだ。同じ目的に向かって力を合わせて登る方が感動も大きい。あまり登頂の喜びを感じないまま、早々に下山にかかる。ルートを変えてアンドロメダとの中間にかかる懸垂氷河を下る。途中500m程が所謂懸垂状で苦勞したが、あとは北面氷河より楽で3時間で下りついた。15年前まだ若く元気旺盛だった頃も、同じ7時間位で往復したことを思うと、我ながらよく頑張ったものと思う。ロッキーで過ごした10日間では、このほかにエディス・キャベル(3,363m)や、ジャスパー周辺のハイキング。カヌーやマリナー・レークでのボート・クルージングなど思う存分に楽しんだ。私にとっては3度目のカナディアン・ロッキーの旅であったが、いつもと変わらずカナダの自然も人も優しく迎えてくれた。今回初めて海外旅行を経験した娘たちは、あまりの語学力の無さに気付き、英会話の必要性を痛感したらしいが、帰国後のアクションはまだ無い。しかし、旅のはじめ頃は親から離れることが出来なかったのに、後半では物怖じもせず一人で買い物を楽しんでいった。自分で見聞し、体験を通じて学びとった力は大きい。新たな夢が娘たちにも育つことだろう。出発前にホテル、レンタカー、航空券だけは業者に依頼して予約をとったが、ホテ

ルは現地料金(約100ドル=1カナダドルが74円位)の3倍位になっていた。レンタカーは1日90ドルだったが、その便利さを考えると安いものだと思う。食料品は、日本食を含め現地で何でも揃い、しかも安かった。結極、2週間のカナダ旅行が一人32万円位に納まったが、海外旅行はすべて自らの責任において“Your own risk”で行動すれば安くあがるものだと実感した。治安もよく家族連れには打ってつけの国ではないかと思う。ごく当たり前自然を保護し、次の世代に引き継いで行こうとしているカナダ。幾度訪れても、その魅力は尽きることがない。

高山の花の思い出

門 脇 愛 子

数多い高山の花のなかで、最初に覚えたのがチングルマでした。昭和37年の夏、初めて北アルプスの表銀座コースを縦走した時、教えられて知ったのですが、そのとき同行した高校生のY君が「チングルマ、チングルマ!」と叫んではしゃぎまわっていたのを思い出します。同時に見たのが、ハクサンイチゲ、ミヤマキンポウゲ、シナノキンバイなどで、これらもしっかりと覚えました。その後チングルマは、花よりも風に長毛を靡かせる実が美しいことも知りました。高山植物の女王と呼ばれるコマクサには、なかなかお目にかかれませんでした。初めて見つけたのは、一人で登った秋田駒ヶ岳の中腹でした。砂礫の斜面で見つけた時は、あまり小さいのでびっくりしました。絵ハガキなどで見ていたときは結構大きな花と思っていたからです。その時の感激を短歌に詠んで投稿したところ“駒草を撮りて”を、“摘みて”と添削され、高山植物は絶対に摘んで帰ることはないのにと憤慨したものでした。それでその選者への投稿は止めてしまいました。別の一首“風強き 稜線に やっと見付たる 駒草は少なき高山植物”

昨夏久しぶりで白馬三山の縦走をした折り、三国境、小蓮華の手前の斜面で、コマクサの群生を見ることができて感激しました。夏山の楽しみの一つにお花畑があります。一番忘れ難いのが、白馬岳北方稜線上にある朝日小屋の、下沢さんに案内していただいた裏夕日のお花畑です。ここはまさに秘境、滅多なことには教えないのだがと下沢さんは、朝日小屋に二泊した私たちを特別に案内して下さったのです。それは昭和48年の夏、蓮華温泉から入り白馬岳、雪倉岳、朝日岳と縦走し小川温泉に下った時のことです。ハクサンコザクラの原、アヤメ平、クルマユリなど色とりどりの花を満喫し、夜は下沢さんから楽しいお話を聞かせていただきました。その後、昭和56年にも朝日小屋を訪れましたが、宿泊客が多く混雑していて案内していただけませんでした。それらのご縁で、今でも年賀状の交換をしています。いつも高山植物の写真入りの美しい賀状をいただき感激しています。朝日小屋は私にとって忘れることのできない最高の山小屋です。また行きたい朝日岳、朝日小屋。でも、もう私にとっては幻のお花畑なのかも知れません。

南阿蘇点描

中村 恵二

“白川水源”

阿蘇五岳(中央火口岳)に降った雨が、ながい年月を経て南郷谷の至る所に湧き出す。そのうち、最も湧水量が多いのが白水村にある白川水源である。これは阿蘇谷、南郷谷の水を併せて熊本平野に流下する熊本の大河、白川の源流地であるが、毎分60屯もの清水を湧出し、池底の砂を舞わせている。環境庁の「名水百選」にも選ばれ、美味しい天然のミネラルウォーターとして既に商品化され、訪れる人も多い。この頃は、休憩所や、土産物店、レストランなどが軒を並べて、すっかり観光地化

されて入園料まで取るようになった。私なども、若い頃は登山の帰路によく立ち寄ったものだった。美味しい水を飲むために、廻り道も厭わずにとぼとぼ歩いて、吉見神社の石の鳥居をくぐり、境内のヒンヤリした空気に触れると、生き返ったような気持ちになったものである。今はハイヒールにサングラス、三段腹のオパチャンたちが闊歩し、登山靴など場違いの場所になってしまった。因に「名水の里」と自称する白水村の湧水地を列举すると、池の川水源、竹崎水源、寺坂水源、塩井社水源、明神池名水公園、湧沢津水源、吉田城御献上汲場と、多士済済である。日本一長い名と云われる、南阿蘇鉄道の「水の生まれる里白水高原」駅は、その中心にある。

“トロッコ鉄道と温泉駅”

かつての国鉄“高森線”は、赤字線としてJR移行時に廃止され、替わって地元が経営する第三セクターの“南阿蘇鉄道”が開業した。やや割高な料金ながら、1両か2両のレールバスが軽ろやかに走っている。聞くところでは、国鉄OBの協力により運営されているそうだが、従来の駅より更に三駅を増置して、地元の利便を図っている。駅舎も国鉄時代の無愛想なものではなく、工夫を凝らしてハイカラな、メルヘンチックな、洋菓子を見るような楽しい建物になっている。またイベント列車として、全国に先駆けてトロッコ列車を走らせている。かつての国鉄の無蓋貨車、通称“トラ”に屋根を張り、木製の座席をつけて2、3両をディーゼルの豆機関車が引っ張っている。春は菜の花、れんげ、秋はススキを縫ってゆっくりと南郷谷を走るが、川下りでもしているような、浮世離れた乗り心地で人気を集めている。もと地獄・垂玉温泉の登り口であった下田駅は、全面的に改築され、駅舎に温泉や物産店を併設して、名前も“下田城ふれあい温泉駅”と改称。他の無人駅にはない活気を呈している。

“ハナシノブ”

阿蘇山野草の一つで、高森の林間に自生するハナシノブは、栽培される花のような豪華さはないが、楚々として慎ましく可憐である。

草丈が高く、その茎の上部に鮮やかな青紫色の花が集まって咲くさまは、踊り子の花簪を見るようで愛惜しい。説明書によると“和名は花の美しいシノブの意味で、シノブは葉の形によるといふ”とある。かつて、現皇后陛下が、開花期に開かれたハナシノブコンサートに來臨された折り、この花にいたく感激されたと聞いた。最近になって、環境庁の「絶滅の恐れのある動植物の保存法」の国内希少種に指定され、採取や取引を禁止することになったそうだ。久木野村では、大々的に栽培して売り出そうとする計画があるらしいが、果たしてどうなることか。矢張り、“野の花は野に置け”と云いたい。参考までに、南阿蘇の自然を飾る山野草を披露しよう。

リンドウ、ツリフネソウ、ヒゴタイ、ヤツシロソウ、カワラナデシコ、ノハナショウブ、ツクシマツモト、ユウスゲ、シライトソウ、ヤマブキノソウ、オカグルマ、サクラソウ、キスミレ、フシグロセンノウ

オーストラリアを旅して

川 端 浩 文

昨年は、7月末から約三週間余、オーストラリアを訪問する機会に恵まれた。それは熊本日豪協会主催の、いわゆる民間大使とも云うべき、学生たちを連れての親善旅行であった。首都のキャンベラ、大都市シドニー、そして、私たちの鹿本町と姉妹提携をしている、クーマとレイモンドテラスをホームステイしながら廻ったのである。また、各地の学校で文化交流を行い、私たちは習字、折り紙、日本食、そして歌や踊りを披露して、日本文化の一端を紹介し好評だった。近年、日豪経済関係の発展に伴い、文化交流も深まって来た。特に日本語教育と、日本文化研究の盛んなこ

とは驚くばかりである。小さな田舎町の学校でも、選択制とは云え日本語授業が行われているのを見た。自動車や電気製品など日本製品が普及し、現地で出会った日本人観光客の多さにも驚いた。南半球にあるオーストラリアは、日本とは季節が逆になる。お陰で昨夏は暑さ知らずで過ごすことができた。私たちが訪ねた地域は、緯度的には日本とあまり変わらないので、冬とはいえ雪が降ることもないようだった。南部のクーマでは雪を戴いた山々を遠望したが、街では少し肌寒く感じる程度であった。乾燥大陸と云われるオーストラリアでは、水の確保が最大の課題で、この地方では、雪解け水を利用して、ダム、貯水池を作り飲用、灌漑、発電に活用していた。

また、オーストラリアは、隔離された巨大な“孤島”であるため、特異な動植物が多い。但し、樹木に関してはユーカリが90%を占めているようで、私たちはホストファミリーの庭で、ユーカリの樹上にコアラの姿を求めたが、これは無駄な努力だったようである。秋から冬にかけて、日本の山野を彩る紅葉は、ここオーストラリアでは見るべくもない。植物の多くは、生気をなくした色合いで冬越しをしていた。かつて、オーストラリアからの留学生を秋の登山に誘った時、紅葉の美しさに感激していた姿を忘れられない。登山については、平坦な大陸オーストラリアは恵まれていない。今回は時間がなくて登れなかったが、あの有名な一枚岩のエアーズロックは、標高867m、但し地上高は342mという。国土は日本の20倍強、内陸部は殆ど砂漠と荒野、東海岸沿いのスノーウイー山地には、2000m前後の山がありスキーが盛んだという。登山は日本ほど一般的でなく、ブッシュウォーキングや、アウトドアの生活を楽しんでいる。スポーツとしては、水泳、サーフィン、ボートセーリング、サッカー、バスケットボール、ネットボール、乗馬、エアロビックスなどを気楽に楽しんでいる。私も、乗馬やブッシュウォーキングに誘われたが、彼等のゆとりあ

る生活の一端を知った。広大なオーストラリアでは、自然発生的に起こる山火事が少なくない。今回も、方々でその被害の跡を目撃したが、油性に富むユーカリの木は、いったん火がつくと、とどまるところを知らず燃え広がる。だが生命力の強いこの木は、すぐ甦って新しい芽をふくという。もともと、降水量より蒸発量が多いので、緑はあまり見られない。粗放的な放牧地では、羊や牛の姿も心なしか哀れに見えた。あの悪名高い「白豪主義」は1973年に廃止され、今やアメリカをしのぐ多民族国家になり、私達も各地で暖かく歓迎された。1982年に日豪ワーキング・ホリデー制度が発足し、また交換留学制度もあり、多数の青年が活用して相互の理解を深めている。

両国間の高校留学生も増加(熊本県内にも3名が留学中)しており、いまや私たちにとってオーストラリアは、遠くて近い国となっている。オーストラリアの原住民アボリジニーの祖先は、今から3万年以上も前に、東南アジアから渡って来たとされている。ヨーロッパ人による発見は遅く、1642年にオランダ人、アベル・タスマンはタズマニア島からニュージーランドを見ているが、大陸は発見していない。1770年、イギリス人のジェームズ・クックが大陸東岸を発見、イギリス領有を宣言した。1778年、最初の流刑者たちが現在のシドニーに上陸した。この日、1月26日が建国の記念日になっている。このことで、オーストラリアは流刑者が建国したと思われがちだが、そうではない。移民流入者により1870年には、人口160万を越え著しい発展を遂げたが、そのうち流刑者は僅か17万人足らずであった。

原住民アボリジニーは、類例のない独特な文化を持っている。その、伝説と神話に題材をとった芸術には素晴らしいものがある。音楽の分野でも、あの独特な音色のデイゼリドゥは私たちに、忘れられない強烈な印象を与えてくれた。「百聞は一見に如かず」の諺通り、これまでのオーストラリアへの多少の偏見も一掃され、いまでは、私にとって大好

きな国のひとつになった。

木の倒れる音

河上洋子

随分昔のことに思えるが、NHKに勤めていた頃だから、たかだか40年しかならないのに、熊本の山や、町村の変わりようは全く幻ではなかったのかと思う位である。あれは昭和33年の夏のはじめ、日赤の僻地診療班が、矢部営林署の内大臣事業所へ健診に行くというのを取材させてもらったことがある。その頃はまだタップリと山にも緑が残っていたし、緑川中流の甲佐町の木材集積場までトロ軌道があった。便乗したトロッコは板切れ一枚で囲いもない。まさに恐怖の乗り物であった。

腰を下ろすと両足は崖っぷちに宙ぶらりん、録音機を抱えて身を竦ませていた。その夜は事業所で山仕事の話聞かせてもらい、翌早朝、私は営林署の職員というより、見るからにこころ樵さんというに相応しいオジさんと二人で国見岳に登ることになった。山仕事の話に迫真性を持たせるために、山の木を切り倒す音が欲しかったのである。当時の録音機は現在のものと違い、手回しでしかもかなりの重量があった。それでも、肩に掛けて一人で持てるというので画期的な新兵器であったが、まかげで取材には技術職員もつかず、女といえど容赦はなかった。歩いて登山口の広河原までどのくらいかかっただろう。当時の広河原にはまだ鬱蒼と茂りあう大木が残っていた。録音機は重いし、私はこの辺りの木でもよいのではないかと、何度もオジさんに言った。しかしオジさんは「こんな木ではよい音は出ない」とニベもなく尾根に取りついて登る。四合目か、それ以上の谷を横切る所で漸く素晴らしい樹に出会う。私の目には、ゆうに数百年は経たシオジの巨木であった。真っ直ぐに天を指した姿の美しさ。オジさんは木肌を慈しむように撫でて梢を見上げる。倒すのに

どのくらいかかるかと問うと、「昔はこのくらいの木だと、二人掛りで大鋸挽いて一日仕事だったなあ。でも今は、この新兵器で先ず40分ほどで倒せるよ」と言う。オジさんが手にしていたのはチェーンソー、つまりは電気鋸であった。その時私ははじめて目にしたが、今にして思えば日本中の山の木が切られ、スギやヒノキの人工林にとって替わられた原因の一つは、この効率抜群の新兵器チェーンソーの出現であったのだろう。選ばれたシオジの大木は、そんなことは露知らず遙かな初夏の空に精一杯枝葉をのびし、さやさやと梢を揺らしていた。「夏には白い小さな花をつけるよ」と、伐採の用意をしながらオジさんは少し湿った声で言った。やがてチェーンソーが唸りだし、あの歯が痛くなるような音在山々に響いた。小一時間、木の皮一枚残すところでチェーンソーを止め、あとは人手で楔が何本か打ち込まれた。それまで木の傍らで録音機を回し続けていた私に、「離れろ」と合図された。オジさんは目をきっと空に向けて、よく透る大きな声で「右カタヤマに倒れるぞー」と叫ぶ。ややおいて斧が「倒れるぞー、ぞーぞー」と反ってくる。しかし百年も生きていた木である。梢から少しづつ傾いてはゆくが、皮一枚でピチッ、ピチッと乾いた音を立て続けてなかなか倒れない。私は録音機を一心に回し続ける、と一瞬「飛び退け！」と鋭い声が走った。大樹はゆっくりと谷側に根元から倒れていった。ドーンと意外に短い響きと、周りの雑木が暫くざわめいていたが、そのあとは信じられない位の深い静寂。怖々と下を覗いたことを今も忘れない。樵のオジさんは黙って切り株に瓶の地酒を注いだ。そして暫くは放心の態であった。下山の道々「大木を切るときは、倒れる瞬間に素早く木から離れないと、木の精が乗り移って気が狂うと言われる。どんな間抜けでも切り株に乗ったりはしないものだ」と話してくれた。今でも山仕事をする人々は同じ思いなのだろうか。人工林のスギなどの切り出しでは、一々そん

な儀式は無いのかも知れないが、私はそれでも山の人々に木を切ることへの恐れや傷みのようなものがまだあると信じた。

しかし、チェーンソーをはじめて見た日から十年も経たぬうちに、九州脊梁の山々は裸同然になってしまった。そして私は、その当時千メートルを超える山に登ることなぞ夢にも思わなかったのに、何の因果が山登りの虜になってしまった。素直に美しく伐られて倒れたあのシオジの精が、若しかしたら私に乗り移ったのかも知れないと、国見岳の登路を辿る毎に思うのである。

1994年の山行

鶴田 佐知子

この一年、また多くの方々のお陰で、私にとって初めての山に幾つか登ることができた。そのうちでもっとも楽しかったのは、ゴールデンウィークの韓国での山旅であった。これは、広吉功さんのヒロオアートスポーツのツアーに参加して、雪岳山(1708m)とハンラサン(1950m)に登ったものである。先ず雪岳山は東草のコンドミニウムで自炊し、早朝から12時間余をかけて主峰の大青峰、中青峰、小青峰を経て千仏洞溪谷を下った。我ながらよく歩いたものだと感心した程だが、途中夜の明け切れない道すがら、タイツリソウを見ることができた。またカタクリも、九州のより大きくて実をつけたのを見ることができて嬉しかった。再訪の韓国の最高峰ハンラサンは、前回のコースとは異なり、片道9.6kmの長丁場だった。帰りは少々ウンザリしたが、ゲンカイツツジの花々に慰められた。私にとっては山の花の旅であったが、これはみな広吉リーダーのお陰である。その広吉さん(宮崎県出身)の縁で、今年は宮崎の山に登った。大崩山群の新百姓山(1272m)五葉岳(1569m)そして梅雨季6月の大崩山(1643m)では、待望のササユリに会うことができた。私が入っている熊

本アルコウ会の例会登山も、楽しいものだった。1月は特別例会の久住山(1787m)。2月は福岡の宝満山(829m)。3月の八竜山(449m)は都合で行かれなかったが、下見調査では2回も登った。しかし、車道ができたために古い山道が崩壊していて、寂しい思いをした。5月の日向大河内の三方岳(1479m)は九大の演習林のなかの気持ちのよい山道だった。6月は、雨の阿蘇烏帽子岳(1337m) 9月は背振山系の九千部山(848m)。11月の阿蘇高岳(1592m)は、中岳火口規制のため日の尾峠から往復した。また、夏のひまわり班(老年組)の緑川水源は、予定を変更して西山の二の岳(685m)、三の岳(681m)となったが、久しぶりで楽しく歩いた。10月初め、孫のお守りを頼まれて上京する途中、中央アルプスの木曾駒ヶ岳周辺で、日本山岳会の「氷河地形を科学する」探索山行があり、参加した。しらび平からロープウェイで千畳敷カールへ。途中、全山紅葉の美しさに目を見張る。浄土乗越を経て宝剣岳に登り、天狗荘に入った。参加者全員が揃ったところで、本部の有井講師により氷河地形の学習会あり、夜は懇親会で賑った。早朝起床、宝剣山頂でご来光を迎える。朝食後6時半出発、中岳を経て駒本峰(2956m)に登頂、南アルプス、八ヶ岳、恵那山、木曾御岳など360度の大観を楽しんだ。馬の背から濃ヶ池へ下る道々、地形や岩石の観察、説明がありたいへん勉強になった。また浄土乗越へ登り返し、カールを囲む絢爛豪華な紅葉を楽しみながら、往路を下った。在京中は、高尾山(600m)小仏峠(590m)のハイキングを楽しんだ。小仏峠近くではサラシナショウマの群生を見た。孫のお守りも、またよからずやである。帰宅して11月、例会の下見で由布岳(1584m)に東登山口から登ったが、日向山分かれ付近のマユミの強烈なピンクの美しさ。錦秋の贅沢なカラーに包まれたコースであった。一年の締めくりは、シェルパアナンの阿南さん(支部会員)の企画で、小岱山と鹿児島県大隅半島の山々に登った。肝属山系の、甫与志

岳(968m)と稲尾岳(930m)に登る予定で、田代町に泊まったが、稲尾岳は道路決壊のため、高隅山系の御岳(1181m)に変更された。稲尾岳は亜熱帯性特有の植生を楽しみにしていただけに、残念だった。しかし、甫与志岳ではシダの美しさと、山頂から見た照葉樹林の輝き、高隅山系、桜島、開聞岳、志布志湾の眺めが素敵だった。この辺りは、もっとゆっくり歩いてみたいと思った。今年も私にとっては、よい山と、花と、人との出会いに恵まれた一年であったと思う。

夏の加賀白山行

神谷平吉

古来、日本三名山のひとつといわれた加賀の白山に、一度は登りたいものと予てから願っていたが、昨年夏、その夢が叶えられることになった。常々お付き合い願っている北陸製菓のT氏(福井県出身)から、盆休みに帰郷するので、白山登山に付き合いたいとお話があった。絶好のチャンスとばかり、早速計画を練り準備万端整えて出発の時を待った。ところが8月9日昼過ぎ、激しい腹痛に襲われた。さらに、夜になると40℃の悪寒発熱が加わった。精査の結果、胆石発作と判明したが、何とか行きたいとの一心で、診療の方は娘婿に任せて自分の治療に専念した。有難いことに、何とか出発のめどがついてホッとしました。13日早朝、家内と共に熊本を発ち、福岡経由で昼前には小松空港に到着した。レンタカーで兼六園、永平寺などを廻り、夕刻宿泊予定の白峰温泉に着いた。翌朝、牛首川沿いに市の瀬へ向かい、溪谷の畔りの広い駐車場に車を置く。ここからピストン輸送のバスに乗り換えて、登山口の別当出合いまで行く。午前9時過ぎ、別当谷に架けられた吊り橋を渡って、砂防新道を登り始める。途中、ミヤマシシウドが咲き零れ、所々にダケカンバが白い風を覗かせる。10時過ぎ中飯場に着くと、御谷にかかる

不動滝が眼前に望まれ、しばしの憩いを楽しむ。昼前、標高1750mの別当覗きに着いた。

砂防ダムが連続する溪谷を俯瞰すると、遙かに別当出合いが望見できた。このあたり、ナナカマドはまだ実も目立たず、ハクサントリカブトの花が散見され始め、針葉樹林帯となって涼風が肌に心地よい。12時30分、甚之助ヒュッテも間近かな道のべに、格好な木陰を見出して昼食、休憩とする。午後2時過ぎ、南龍ヶ馬場への分岐点に到達する。なだらかな斜面一帯に紫色のハクサントリカブト、ピンクのシモツケソウなどの花々が咲き競い、一際目を惹いた。午後3時半、宿泊予定の南龍山荘に到着し重荷を下ろす。まずは広い食堂で憩い、コーヒーの香りを楽しみつつ白山の写真集を繙いたりした。その夜は上弦の月が沈む頃、銀河は乳白色に輝き、満天に煌めく星々の豪華さに、しばし我を忘れた。翌朝早く山荘を発ち、トンビ岩コースを室堂へ向かう。見晴らしのよい草原いっばいに燦々と陽光は降り注ぎ、快適に高度を上げて行く。

急峻な御前坂の中腹から、木曾御岳の秀麗なピラミッドが印象的に望まれる。午前9時前、トンビ岩に到着した。此処からは、女性的な白山のドームが指呼の間に望まれる。ハイマツ帯を縫うように登り、ナナカマドやコケモモの赤く熟れた実を愛でつつ行く。万歳谷雪溪が白く斜面を覆う辺りには、一面にミヤマキンボウゲが咲き溢れ、私たちは山行の幸せに酔い痴れる思いであった。程なく室堂に着いてザックの重荷から開放される。

明るい岩間を縫って登り詰め、午前11時、白山の最高峰、御前峰(2702m)山頂に到達した。眼前には、翠ヶ池や千蛇ヶ池など池沼群がある火口跡を囲んで、剣ヶ峰、大汝峰のピークが立ち並んでいる。小雨のため池沼群の大半は、水のない空池になっていたのは残念だ。

遙かに連なる北アルプスの山々。なかでも、一際群を抜いて聳える槍ヶ岳の尖峰の、孤高の美に感動する。間一髪、病を癒して家内と共に登ることができた宿願の山頂に立って、

私は深い感慨を禁じえなかった。

帰路は、五葉坂を弥陀ヶ原へと下る。広闊な草原を彩る豪華な高山植物の数々に、胸躍らせながらゆっくり歩く。黒ボコ岩を経て往路の砂防新道に至り、夏の陽が傾きかけた長い登山路を、一步一步別れを惜しみつつ別当出合いへ向けて歩き続けた。

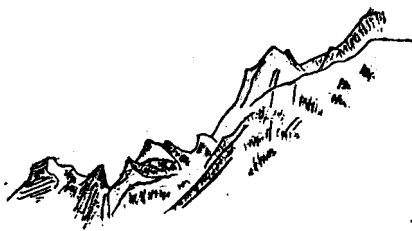
風雨の霧島山

神谷文子

かねがねお付き合いいただいている、S銀行支店長のIさんは、京都から単身赴任されて一年余になります。このところ多忙な仕事の合間を縫って月一回位、山行を共にする習わしとなっています。昨年秋の連休には、幸い時間がとれて、霧島へご一緒することができました。10月8日早朝、熊本を発ち、昼過ぎにはえびの高原に着きました。当日は朝からさっぱりしない、ぐずぐずした天気でしたが、やっぱり山では雨になってしまいました。それでも白鳥山から白紫池、六観音御池、不動池と廻って、早々に硫黄谷温泉のホテルに入り、藪々と溢れる湯舟で汗を流しました。

翌日は期待も空しく、深い霧に包まれた雨の朝となりました。それでも、折角来たのだからと出発し、8時半過ぎに高千穂河原に着きました。早速、雨具に身を固めて、石畳の登山道に足を踏み出しました。しかし、ガレ場の急斜面にかかる頃は、一層風雨も強まり危うくスリップしそうでした。それでも10時過ぎには、お鉢北面入り口の標識に到着しましたが、これからが大変でした。風雨は益々激しくなり、身体ごと飛ばされそうで、身を屈めながら慎重に歩を進め、お鉢の縁を廻り込みました。此比で3、4人のパーティが下って来るのと出会いましたが、聞けば、馬の背の鞍部から急斜面を登りかけた所で、余りの風雨の激しさに、堪まらず引き返して来たとのこと。ここに至って、私達も危険を冒す

ことはないと判断して、高千穂峰の登頂を断念しました。激しい雨と風に追われるように下山して、正午過ぎには何とか高千穂河原に辿り着くことができました。ビジターセンターに行き、びしょ濡れの衣類を着替えて昼食を済ませました。午後は大浪池を訪ねましたが、矢張り深いガスに包まれて、何の眺望もありませんでした。三日目の朝も期待を裏切る激しい雨と風です。しかし、意を決して出発し、8時過ぎえびの高原の駐車場に着きました。案じていた通り一台の車も見当たりませんが、再び雨具に身を固めて歩き出しました。高原を横切り、硫黄山を左に見ながら、石ころだらけの登山道を、霧島の最高峰韓国岳の山頂目指して登ります。頂上が近づくにつれ、風はいよいよ強く、横殴りに雨が降りつけ目も明けられぬ位です。午前10時過ぎ、深いガスが渦巻く山頂に着きましたが、何処が山頂なのか、探すのにひと苦労したほどです。3人だけの山頂を踏み、すぐに下山しました。この日はついに一人の人にも出会いませんでした。好きな山なので、今までずいぶん霧島には来ましたが、今回のように殆ど無人ということは有りませんでした。広大な霧島の山を一人占めしたようで、何か勿体ないような、しかし連日の風雨に打たれて、却って心身を洗い流されたような、爽やかな気分でした。(負け惜しみに非ず)それにしても、初めての霧島だったIさんにはお気の毒でした。また何時の日か素晴らしい快晴の日にご案内したいものです。



服装は登山の脇役だ！ (華美をさけて身にあったものを)

広 吉 功

春、新しい人生が始まる季節。街角にピッカピカの新入社員の姿が目につく。いつもながら“とってつけた”ような格好である。意地悪く値踏みさせてもらうと、外国ブランドの二十万円は下らないスーツを着こんだものもある。勿論見合っていればいいが、痴鈍な(失礼)彼の表情からは着こなしているという自信は読み取れない。つまり中身が伴っていないのである。「古くてもいい、ちゃんと洗濯がしてあって清潔であれば、立派なものだ」高校卒業の時、言われた校長先生の言葉を今も忘れない。風雪に明け暮れる冬山。おさりのラクダのシャツ、ビニロンのヤッケ、特大のキスリングザックを担いでラッセルする辛さは忘れがたい。厳冬期の北アルプスでは、今でもこんな装備の学生達に会うことがある。自分の過去の姿に重ねて、無言の拍手をおくる瞬間でもある。八ヶ岳や、中央アルプスの宝剣岳など、冬期営業小屋を持つ山域では、この時期ギンギラギンの華美な服装・装備でやって来る登山者が目につく。小屋泊まりの冬山だから衣・食・住のうち食と住はあるので、とは自前の服装・装備だけで気軽に来れる。

テントも、寝袋も、コッヘルも、食料も要らないし担がなくてもよいのである。あとは軽くて嵩張らない紙幣(お札)があればよい。

しかし、プラスチックブーツを履き、フリースやクロロファイバーの中間着にゴアテックスのヤッケなど、一流品に身を包んだ冬山登山者たちが、赤岳鉱泉への雪道をよたよたと歩いていく。凍結した橋は渡れないと言って大騒ぎをしたり、トレースを外して雪中でもがいたり体たらくである。赤岳や阿蘇岳は自信がないからと、硫黄山に登ろうとしてこれも断念。引き返す折りに、せつやくま

れたトレースを、尻セードで崩してしまい迷惑千万。他人のことは全く考えていないのである。厳冬期のヒマラヤでも行けそうな装備で、営業小屋のある冬山を闊歩？するのである。ワンタッチ式のアイゼンを持ちながら、宝剣岳や硫黄岳にも登れないのである。千畳敷のロープウェー駅下の冬季出入り口から、50メートルも歩かずに引き返した人はまだいいとしても、ガスのカールを徘徊して救助されたり、昼頃下ってきて、雪崩に巻き込まれるなどは見苦しい。冬山は、小屋から一步でも出れば風雪吹き荒ぶ世界であることを、もっと認識して欲しいものである。昔にくらべ登山の服装・装備は画期的に改良され、道路やロープウェー、山小屋などの施設も整備されて人々を冬山に誘う。「年をとったら、冬山はしんどいから、もういかん」とは建て前の話。本当は登れなかったのであろう。つまりは、装備の軽量化と、交通、宿泊施設の充実でそれが可能となった現在でも、実力にあった山の選定こそ必要であろう。服装・装備は飽くまでも脇役であって、主役には成りえないのである。そのことを忘れないで、実力に合った十分に使いこなせるものを、慎重に選ぶべきであろう。ステップ・バイ・ステップ、それが遠回りの道であろうとも……。

38年目の五龍岳

池崎浩一

昨夏は、かつての電登山岳会時代のメンバー4名(本田、藤本、太田、池崎)で、後立山連峰北部の縦走をした。実に38年ぶりに五龍岳の山頂に立った時は、往時を想い些か感慨深いものがあった。梅池から、白馬大池を経て白馬岳に登り、白馬鑓、不帰ノ険、唐松岳、五龍岳と縦走して遠見尾根を下った。後立山連峰は、3000mを越す峰こそないが、豊富な残雪と多彩な高山植物があり、縦走ルートも、小蓮華山への緩やかな尾根歩きから、不帰ノ険周辺の険しい岩稜など変化に富み、登山の楽しさを満喫させてくれた。今回は白馬大池山荘、天狗山荘、五龍山荘などの山小屋を利用したが、シーズンには、このような3食賄い付きの山小屋が数多く営業しており、重荷を担ぐこともない。冬季はともかく、私たち中高年者には取り付き易い山になった。いまから38



天狗山荘

年前、冬山(遠見尾根から五龍岳、唐松岳)、春山(大雪溪から白馬岳、杓子岳)と青春の血をたぎらせた思い出の山であり、ながく音信のない友に会いにゆくような、懐かしさを覚える山旅でもあった。しかし、移り変わりの激しい当今、変わっていて当然ながら安曇野の変貌には驚いた。遠見尾根も、八方尾根も、梅池も山腹までリフトが架設され、広大なスキー場が櫛の歯をひくように出来ている。多くの観光施設や、ホテル、ペンションなどが山林を切り開き、田畑を埋めて建設されていた。「自然保護か、開発か」と云われて久しいが、もうこれ以上の開発は差し控えて貰いたいものである。今度の山行は7月19日から始めたが、夏休みに入る前なので山はまだ閑散としていて、行き交う登山者も少なかった。詰め込みで悪名高い山小屋もひっそりと静かで、伸び伸びと広いスペースで足腰を伸ばすことが出来た。また皮肉にも折からの日照り続きで、好天にも恵まれた。期間中は、早立ち(午前6時)早着(午後3時)早寝(午後7時)とセオリー通りの健康、安全登山を心がけた。流石に初日は旅の疲れもあり、梅池から乗鞍への急登は些か応えた。だが最後まで、このオールドメンバーの中で不調を訴えるものもなく、元気に歩くことが出来て幸せだった。縦走路は総じて歩き易く、指導標も整っていて、ガスがかかっても迷うことはなかった。高山植物は開花期とあって、小蓮華山への広い尾根筋をはじめ、至る所で見事な彩りを繰り広げ、目を楽しませてくれた。天狗尾根から不帰ノ険を隔てて、唐松岳に対する辺り、右手遥かに立山、剣岳などの高峰群を望み、まさに天下の絶景と感激した。縦走の核心部として興味を抱いていた不帰ノ険は、難場には梯子や鉄鎖、ロープなどが取り付けられ、緊張はしたものの、さしたる危険を感じることもなく通過した。最終ポイントの五龍岳は、五龍山荘から空身で往復した。山頂までガレ場続きのルートに登りながら、38年前の冬山のトレースを思い出すことができなかつた。五龍山荘も当時は白岳小屋と云

って、小さな避難小屋程度のものであったが、吹雪かれて2日間閉じ込められ、大袈裟に云うと九死に一生を得た思い出がある。この所、2年続けて夏山を楽しむ機会に恵まれた。1993年には、富士山に続いて南アルプスの北岳に登ったし、今回はこの縦走を果たすことができた。その前の1992年には、熊本支部のカナディアンロッキー登山を目前にして、体調を崩し涙をのんだ苦い思い出があるだけに、私にとってこの二つの山行は貴重な財産となった。まだやれると思っている内に、私も古希を迎える年になった。今後は年相応に、「山に登る」から、「山を楽しむ」で行きたいと思っている。しかし山登りは、技術的にも、体力的にも困難が多ければそれだけ楽しみも大きいし、このへんの兼ね合いを考えると、どんな山登りをすれば満足出来るか、そんなことも考えさせられる山行であった。



ひとり歩きの山

出来田 耕 介

私は平均すると年間に50回は山に登っているが、そのうち40回位は単独行である。

中高年の山の遭難が多いと云われる昨今、63才という私の年齢での単独行は、罪悪視されているようで少々気がひける。単独行の先駆者、加藤文太郎が云っているように「私だって、よい仲間と一緒に山に登るのは楽しいことだと思っている」は、私も同感である。

加藤文太郎は、厳冬期の北アルプスのロングコースを踏破するという記録を打ち立てた

超人である。私には到底そんなことは出来ない。私の場合は精々日帰り往復できる九州の山々であり、彼とはくらぶべくもない。

しかし本質的には一人で、自分のスタイルで山を楽しむという点では、私の一人歩きも単独行と云えなくもないと思う。私の行動範囲は九重山群をはじめ、阿蘇山、祖母・傾山群そして熊本近郊の里山である。私が好む山の第一条件は、人が少ない静かな山であること。そのためには好きな山でも、人の少ない時季とコースを選ぶことになる。ブナやナラ等の落葉広葉樹の自然林の中を一人歩くのは、私にとって至福の一刻である。殆どが伐採された九州の山でも、僅かに残されたこれらのコースを歩くとき、この幸せな時間を出来るだけ長くしようと、私の足取りは自然と遅くなる。この条件に近いのは祖母・傾の縦走路や、九州脊梁の国見岳周辺などであろう。

次に、少し妥協してカシ、シイ等の照葉樹林、早く云えば雑木林のあるコースと云うことになる。里山と呼ばれる低山にも、伐採を免れた気持ちのよい山道が残っている所がある。地表にはシダが生え、ツワブキの厚い葉が見え、子供のころ登った裏山などが思い出されて懐かしい。木の葉山の奥や八峰山、三角岳などにその面影を見ることが出来る。

最後に最大限妥協して、スギ、ヒノキ等の針葉樹の造林地と云うことになる。鞍岳、阿蘇南外輪山、甲佐岳などがこれに入る。

私は家を出るとき、凡その方向は決めて行くが、その時の気象条件でどのコースをとるかを決める。無風快晴で白雲が悠々と浮かんでいるような日は、例えば九重山であれば赤川から扇ヶ鼻へのコースをとり、途中のあるアングルからの久住山を撮影するのが、無上の楽しみである。写真撮影ということでは、私は山に行く時は三個のカメラを持って行く。35ミリカメラと交換レンズ、6×9判の蛇腹カメラには赤外線用のフィルム、もう一つの中判カメラにはモノクロとカラーフィルムの両方を用意し、臨機応変に撮り分けることにして

いる。これらのカメラは全て手動式で、先ず距離を合わせ、単体露出計で明るさを計り、絞りとシャッター速度を決め、撮影後は手巻きでフィルムを巻き上げることを厭わない。

まことに時間がかかる写真であるが、それだけに仕上がりを楽しみである。一人歩きの次の理由は、私は朝が早いことである。体力維持のため始めた早朝ジョギングの習慣で、毎朝四時には目覚める。朝食を済ませて出発しても、七時には登り始めることができる。だから途中で知人と出合っても、大抵私は下山の途中、相手は登りの途中と云うことになる。早く登って早く下ると、帰宅後街に出て必要なショッピングをする余裕も出来る。

その次の理由は、個人の体力の差から来るものである。自分より強い人と同行する場合、少しでもザックの軽量化を図るため、例えば愛用の石油コンロは携行を割愛することになる。またカメラにしても何台も持つては行けない。撮影に時間をとっては相手を待たせることになるので、これも止めておこうということになる。こんなことでは折角山に行っても、十分に自分の遊び心を満たすことが出来ない。これでは困る。私はこの頃ピークハントの楽しみが以前ほどにはないと感じている。これは怠惰が原因かと思うが、山頂よりもアプローチの中で好ましいと思う所で、好きなように自分の時間を楽しみたい心が強く働くのである。昨年の夏、一人猛暑を避けて久住山に登った。一応山頂は踏んだものの、その帰路溪流の傍らで小半日、文庫本を読んで過ごしたことがある。私のザックにはいつも、小型のナタと折り込み式のノコが入っている。倒木で山道が塞がれ、危険な巻道がつけられているところがあれば、時間をかけてルートを開く。またイバラを被った山道はナタで切り開いて通れるようにする。当然予定時間を超過することになるが、目前の障害物を排除して行く行為には、自分なりに爽快感があり、労力が苦にならない。これまではやや危険と思われる所でも、一人でスリルを楽しんだり

迷いそうな心細い踏み跡を不安な気持ちで通ったこともあった。山の楽しみの一つに、このような不安感、緊張感があるということを読んだことがあった。危険を侵すことはあつてはならないが、山登りには適度の緊張感が必要だ。私の単独行は、今のところ全く自由で好きなことを好きなだけやったら、いつの間にか時間が過ぎていたという、人生最高の贅沢を楽しんでいるということになると思う。

北アルプスぶらり山旅

後藤之俊

盛夏の北アルプスは喧噪と雑踏でうんざりする。静かでぶらぶら歩けるルートはないか、思案の末選んだのが信濃大町～黒部湖～五色ヶ原～薬師岳～太郎兵衛平～雲の平～真砂岳～湯俣～高瀬ダム、と北アルプスの最奥部をひとまわりするコースである。一週間の行程の始めはまことに調子がよかったのだが、後半はバテてふらふらになってしまった。以下はその道中記である。

第一日(8月19日) 黒部湖～平ノ小屋

JR大糸線の信濃大町駅で、同行する東京の知人と落ち合い黒部ダムへ。ここまでは観光客の世界。ダムサイトから歩行開始。湖の右岸沿いの山道に入ると静寂が支配する。コバルトブルーの湖水を隔てて、紺碧の空に映える赤沢、スバリ、針ノ木の鋭峰を仰ぎ見ながら歩く快適な四時間。平ノ小屋は湖岸の高みにあって、テラスは湖畔の別荘にでも居るかのようなたたずまい。泊まり客は五人でゆったりしていたが、その日、針ノ木岳で遭難発生。小屋に救助本部が設置されて、救助隊員たちの緊迫した捜索の打合せが夜半まで続いた。

第二日(8月20日) 平ノ小屋～刈安峠～五色ヶ原

低気圧の接近で天気は下り坂。六時前出発、小屋を出ると道はやがて湖を離れ峠を目指してひたすら登る。峠を越えてもなお登りは続く。小屋を出て五時間、勾配が緩くなった所で栈道がある湿原の一角に出た。所々に雪溪

が残る。五色ヶ原に着いたのだ。晴天続きで池塘の水は涸れ、湿原の高山植物も花の季節は去って早や秋色。そこへ雨が沛然と降りだした。草原は忽ち潤いを取り戻し、池塘は本来の池となってその幽邃さを蘇らせた。

午後一時、五色ヶ原山荘に入る。折から五色ヶ原は富山国体高校山岳競技の会場となっていたが、俄か雨に選手や役員がなだれ込んできて山小屋は超満員となった。

第三日(8月21日) 五色ヶ原～スゴ乗越し

雨はあがらず6時前出発。ガスで視界はゼロ。鳶山、越中沢岳と雨中の縦走は遠望がきかず鬱陶しいが、高山植物が目を楽しませてくれる。瞬時、薬師岳の頂きが雲間に垣間見えたが、左手に切れ落ちた黒部の上の廊下側はなにも見えぬ。スゴ乗越しまではアップダウンの繰り返しが続く。下りの急斜面で、前後して歩いていたパーティの一人がスリップ。あわや谷底への一瞬、辛うじて助かったのを目撃した。濡れた草木、濡れた雨具が潤滑油の働きをしたためのスリップであったのだ。(救助したサブリダーの脱兎のような身のこなしには感心した)スゴ乗越し小屋には午後二時に到着、すでに満員の盛況であった。聞けば、すぐ近くのテント場に昨夜熊が現れたという。キャンパーが難を避けて小屋に駆け込んだのだ。

第四日(8月22日) スゴ乗越し～薬師岳～太郎兵衛平

雨はあがったが、依然ガスで視界がきかない。六時出発。間山、北薬師を経て薬師岳が近くなってくると、雲ノ平越しに黒部五郎岳が姿を見せる。眼下に狐を掻く薬師のコールが美しい。登り詰めると、如来像を安置した御堂がある山頂についた。今回のコースの最高点(2926m)だが、残念ながら雲に遮られて展望はあまり利かない。山頂からガレ場の下降が続く。休憩小屋を過ぎると小さなピークの一つ。そこからまた急降下して太郎兵衛平の一角に出る。ひと登りで午後二時半、太郎平小屋に到着した。小屋の周りは高山植物の大群落であるが、花の時は過ぎている。小屋は満員、バテてげんなり、~~加え~~。

第五日(8月23日) 太郎兵衛平～雲ノ平

明ければ快晴。雲海の上に黒部五郎、三俣蓮華、祖父、鷲羽、水晶と息をのむ大展望。ハイな気分です六時スタートする。薬師沢に下ると沢沿いの道は鼻唄まじりの快適さ。ここはまだ夏、咲き乱れる花、涼風が肌に心地よい。しかしそれも薬師沢小屋まで。小屋の前で黒部本流に懸かる吊り橋を渡ると、道はすぐ谷を離れて雲の平への長い長い急登になる。ゴロゴロした岩の道である。周りは樹木で視界はきかず、目を楽ませるものもなく息を切らしてただ登るだけだ。ほとほとうんざりしてきた頃、ようやく傾斜が緩くなってやがて栈道となり、湿原が現れ道松帯に入った。もう雲の平の一隅である。暫く行くと視界も開けてきて、何と三俣蓮華越しに槍ヶ岳の北鎌尾根が見えるではないか。気分一新して爪先上がりの栈道をまた一頻り歩く。午後二時過ぎ雲の平山荘に到着。この一帯も高山植物の宝庫であるが既に秋色が濃い。一寸大袈裟と思える名がついたスイス、アラスカ、日本庭園などの巡遊は取りやめて、ガランとした大部屋でさっさと布団に潜り込む。

第六日(8月24日) 雲の平～真砂岳～湯俣

雲は少しあるが先ず先ずの天気。今コースの最長距離を歩くため五時に出発する。疲労がとれずふらりふらりと頼りない足取り。祖父岳への急なガレの登りは、足もとがズルズルして定まらず心身共に消耗する。時折り不整脈もあらわれて、文字通り四苦八苦の末やっと山頂にたどり着いた。しかし、360度ぐるりと見回す山岳景観の素晴らしさに思わず声をあげた。眼下に広がる雲の平を隔てて立山連山と左手遠く白山、手前に薬師の雄大な山体。間近かに水晶岳(黒岳)と稜線つづきに赤牛岳。振り返ると黒部の源流越しに黒部五郎、



鷲羽、三俣蓮華とその背後に双六の鋭峰、さらにその左奥手には朝日に輝く槍、穂高の峰々が連なっている。豊饒の時を過ごしたあと、岩苔乗越しを経て水晶小屋への道を辿る。体力も大分あやしくなってきた。水晶岳山頂を往復する余力はなく、そのまま東沢乗越しへそして真砂岳へ。崩壊地のトラバース、崩れやすいガレ場の登降が続いていよいよバテピッチ。細い岩稜の通過にも何とか耐えて、ふらふらと高瀬川畔に下りつき湯俣の晴風荘にへたりこんだのは午後五時半であった。乳白色の内湯に浸り一杯呑んでカイコ棚に横たわると、やっと人心地がついた。

第七日(8月25日) 湯俣～高瀬ダム

快晴!今日は川沿いに下るだけ。出がけに川原を流れる湯を小石でせき止めた露天風呂に浸る。眼前は川の流れ、その対岸は鋭く切れ落ちた樹林の垂壁。まことに湯快?である。八時に宿をあとにする。高瀬ダムサイトへの道は快適な林間の歩道。バテきった身にはたいへん有難い。路面は土からバラス敷さらに舗装と変わり、トンネルを抜けるとそこはもうダムサイト。正午過ぎタクシーで信濃大町へ、JR大糸線に乗り込むと余力はすっかりゼロになっていた。

マカルーへの想い

馬場 博行

この度、隊員に選ばれて'95日本山岳会マカルー登山隊に、参加させていただくことになりました。マカルー登山は私の強い希望でもありましたが、この実現に当たっては支部長はじめ支部会員の皆様と私の職場(NTT)の皆様のご理解とご後援をいただき、心から厚く感謝申し上げます。私とマカルー峰との出会いは、10年前の1985年に始まります。冬のマカルーを目指して山仲間の同志が集い、当時ヒマラヤのジャイアントに立ち向かうには、余りにも小さな登山隊を組織しました。

世界初の冬期登頂を目指したのですが、力及ばず、また悪天候のため北西稜7520m地点で断念しました。あれから10年、その間何度かリターンマッチを図りながら果たせず、夢にまで見たマカルー登山のチャンスが再来したのです。今回選ばれた隊員のなかでは私が最年長で、マカルー登山期間中に47才を迎えます。しかし、まだまだ気力十分と思っています。チベット側からのこのルートは、史上初のものです。約10kmに及ぶ東稜線は、岩壁あり氷壁ありの岩稜で、ヒマラヤでも例がない登攀部分の多い、長大なルートと云われています。前途には様々な危険や困難が待ち受けていると思います。私は、重広隊長をはじめ優秀なクライマーの仲間たちと、一体となって強力なチームワークを組み、全力を尽くして是非成功させたいと思っています。熊本支部の皆様には、いろいろお世話をかけますが、どうぞよろしくお願い致します。

山 登 り 3 5 年

(新入会員の自己紹介)

加 藤 功 一

私の登山は、昭和35年(1960年)当時の電々公社に入社とともに始まり、以来35年間続いています。最初の頃は一人歩きでしたが、新入社員訓練の際、電々九州山岳会があることを知り入会しました。丁度その頃(1963年)、会はネパールヒマラヤのヒムルンヒマール遠征準備中で、私は新人としてその作業を手伝いながら「俺もいつかはヒマラヤへ行くぞ」と、心中期するところがありました。それからは、福岡の野北の岩場や、阿蘇高岳北面鷲ヶ峰でのロッククライミングをはじめ、北アルプスでの積雪期登山により自らを鍛えて来ました。残念ながらヒムルンヒマールは登頂ならず、そのあと第二次遠征が計画されましたが、ネパール政府の登山禁止により実現しませんでした。10年後の1973年、私は山岳会のチーフ

リーダーとして、第三次遠征計画を推進しましたが、途中、病気で倒れ断念しました。その後、再起を図り日常のトレーニングに励みました。その頃は、植木町の自宅から熊本市の勤務先まで13kmを、往復歩いて通勤したものです。さらに10年後の1983年冬、私は馬場博行君らNTTの4人の仲間とネパールヒマラヤのカングル(7010m)に挑み、念願の厳冬期初登頂に成功しました。

今は仕事の都合で、海外登山など長期にわたる山行はできませんが、やがて自分の時間が取れるようになったら、再びヒマラヤに行きたいと思っています。私は、とにかく山が好きで好きで、山に行かないと頭痛がする位です。最近では近郊の山(小岱山、鞍岳、八方ヶ岳、三ノ岳等)を毎週歩いております。

山 へ の 再 出 発

(新入会員の自己紹介)

太 田 章 雄

私は平成2年5月にNTTを退職したが、昨年、思うところあって在職中に中断していた山登りを再開した。そのきっかけは、NTTのOB組織である熊本電友アルコウ会の例会に参加したことである。その時からの職場山岳会時代の先輩から、後立山北部縦走の計画を聞かされ、老化するにはまだ早いと参加を申し入れた。何といっても30数年ぶりの山行になるので、心身の準備はもとより、すっかり陳腐化した登山装備の調達もたいへんだった。早速、体力トレーニングを始めた。

早朝、自宅から花岡山まで往復2時間のウォーキング。出発までには何とか体調を整えることができた。7月下旬、学生の夏休みが始まる前に、梅池から白馬大池、白馬岳、白馬鍾ヶ岳、不帰ノ険、唐松岳を経て五龍岳に登り遠見尾根を下った。今回のルートは昭和33年9月、第13回富山国体に参加した帰路に歩いた思い出深い場所。62才の私が最年少と

いう4名のオールドメンバーながら、気の合った仲間楽しく歩くことができた。私の山への再出発には、まことに相応しい山行になったと思っている。振り返れば、1954年頃から当時の職場山岳会の一員として、スポーツ登山を目指して岩登りや雪山などに、若さの情熱を燃やした時代があった。久しぶりで山稜に立つと、それらが鮮明な印象となって甦ってくる。阿蘇の岩場での合宿訓練、九重、祖母・大崩、霧島そして九州脊梁山地の縦走から本格的な雪山体験。先ず1956年1月、冬山初年兵として遠見尾根から五龍岳に登ったが、サポートメンバーとして連日ラッセルに苦闘、以後の冬山は早月尾根から剣岳登頂、次いで小窓尾根からは豪雪に阻まれて敗退の苦汁を吞まされた。しかし冬山の苦しみと共に美しさも堪能できたと思う。冬と違い春山は楽しい。1958年4月の燕岳から槍・穂高の縦走は、門田の8本刃アイゼンを履きっぱなしで雪稜を駆け抜けた。翌年、積年の願望だった北鎌尾根から槍ヶ岳は、流石に緊張の連続で重荷と雪庇に苦しみながら完登した。昨年秋、既に入会していた先輩の紹介で、伝統ある日本山岳会に加えていただいた。長い間遠ざかっていた山岳写真にも再挑戦を始めた。夢よもう一度、体力と意欲の続く限り、安全で実り豊かな山登りをしたいと願っています。

会 務 報 告

◇青年登山懇談会

日 時 平成6年2月26日(土)～27日(日)
 場 所 東京都八王子市下柚木1987-1
 大学セミナーハウス
 内 容 パネルディスカッション
 「若い人に魅力のある日本山岳会にするために」
 支部事務局担当者会議
 海外登山報告
 出席者 馬場博行(熊本支部)

◇春季例会登山(大崩・五葉岳 1570m)

日 時 3月12日(土)～13日(日)
 場 所 宮崎県西臼杵郡日之影町立水無平「あけぼの荘」
 内 容 雨模様の空を気にしながらも、午後七時には参加者全員が、あけぼの荘に顔を揃えた。懇親会はシシ鍋を囲み、シカ刺身、ヤマメ塩焼、地豆腐、山菜料理それに差し入れの酒、焼酎もふんだんにあり盛会だった。翌朝は夫々マイ・カーに分乗して出発。先ず先ずの天気で日之影川を下り、中村橋を渡って大吹谷に沿う林道を溯る。小屋の谷出合いのゲート前に車を置き、林道を歩く。奥州屋谷の吐合いから、ヒノキ造林地の尾根道を登る。山腹を東へ廻りこんで、岩まじりの急坂を登り詰めると、岩盤状の山頂に着いた。折しもガスがきかれて、霧氷に飾られた大崩山群の山々が勢揃いする。期待通りの展望に満足し、時間が早いのでお姫山へ廻ることにして急坂を下る。瀬戸口谷の鞍部まで下り、お姫山に登り返す途中で、ブナ林の下のスズが円形に切られた格好な休み場があったので、弁当の包みを開く。お姫山(1550m)は、その名に似合わず切り立った岩峰。五葉岳にはないゴヨウノマツもあり、南画のようなたたずまい。自然林とササの尾根道は風が吹くと、霧氷がさらさらと花吹雪のように降りそそぐ。大きく枝を広げたブナの巨木が立つところから、右の尾根を



下る。程なく尾根上の小ピーク、お化粧山(1450m)に着いた。その名の由来を書いた案内板が、樹間に下げている。昔、大崩の峠を越えて大吹鉱山を目指した遊女たちが、ここで化粧直しをしたとある。小屋の谷の下りが、予想以上に長く感じたのは、前夜のアルコールの所為か…

出席者 西沢・石井・本田・和仁古・広吉・樋口夫妻・神谷夫妻・藤本・池崎・出来田・後藤・丸尾・前田 (15名)

◇支部委員会

日時 4月3日(日)18:00~20:00

場所 熊本市内坪井 ホルン山小屋

内容 支部総会の議案検討

出席者 本田・和仁古・田上・河上・中村・広吉 (6名)

◇平成6年度支部総会

日時 4月24日(日)17:00~21:00

場所 熊本市内坪井 ホルン山小屋

内容 平成5年度事業および収支決算報告
・収入…582,052円 支出…168,474円
・繰越…413,578円

平成6年度事業計画・予算

- ・8月 夏季例会(ビールパーティ)
- ・11月 秋季例会(九州四支部合同会議) 高千穂町三秀台
- ・1月 支部新年晚餐会
- ・3月 春季例会
- ・予算 収入 510,000円 支出 180,000円 繰越 330,000円

*役員改選 支部長 本田 誠也(再任)
副支部長 和仁古 昇(再任)

*懇親会

出席者 奥野・西沢・馬場(猛)・宮崎(豊)・本田・田上・和仁古・中村(恵)・川端・河上・樋口・広吉・池崎・出来田・後藤・丸尾・前田 (17名)

◇平成6年度通常総会

日時 5月21日(土)14:00~16:00

場所 東京都千代田区大手町1-8-3 J Aビル

内容 支部長会議 10:30~12:30

総会 創立90周年記念行事について
'95マカルー東稜登山隊について

懇親会

出席者 本田支部長 (188名)

◇支部委員会

日時 5月29日(日)18:00~20:00

場所 熊本市内坪井 ホルン山小屋

内容 通常総会報告
'95マカルー登山隊隊員に馬場博行会員を推薦する

出席者 本田・田上・河上・広吉・馬場(博) (5名)

◇夏季例会(ビールパーティ)

日時 8月21日(日)18:00~21:00

場所 熊本市内坪井 ホルン山小屋

内容 恒例の神谷会員の8mmビデオ作品は、「阿蘇高岳行」「五葉岳」そして芸術的な香り高い「春よ山を彩る花よ」にみな堪能した。また平均年齢60才を越えているとは思われない、活発な夏山報告あり。剣岳(1名)後立山縦走(7名)白山(2名)北岳(1名)カナディアンロッキー(1名)

出席者 奥野・宮崎(豊)・石井・本田・田上・和仁古・門脇・河上・鶴田・広永・馬場(博)・吉田・神谷夫妻・池崎・宮崎(守)・深堀・出来田・加藤(功) (19名)

◇平成6年度全国支部懇談会(関西支部)

日時 10月15日(土)~16日(日)

場所 兵庫県養父郡関町ハチ高原パークホテル白樺館

内容 懇親会
記念登山 氷ノ山(1510m)
谷コース 布滝、地藏堂経由で登る

出席者 西沢・本田 (125名)

◇支部秋季例会・九州四支部合同会議

宮崎支部創立10周年記念集会
第10回宮崎ウエストーン祭

日時 11月2日(水)~3日(木)

場所 宮崎県高千穂町五ヶ所 三秀台

内容 標記の四つの行事を一括して実施した。

- *九州四支部合同会議(五ヶ所小学校体育館) 福岡支部提案の屋久島自然観察登山について討議・本部、中村副会長の「ピレネーの山旅」スライドと講話
- *ウエストーン祭前夜祭(農業改善センター広場) キャンプファイヤー、地元の小中学生による夜神楽、コーラスなどあり、また模擬店も出てカッポ酒が振る舞われるなど、夜半まで賑わった。
- *第10回宮崎ウエストーン祭 第10回ということで、テレビなど報道陣

の取材もあり、100名が参加して盛会だった。

***宮崎支部創立10周年記念登山**

本部の中村副会長ご夫妻と共に47名が、筒ヶ岳(1296m)に登った。

参加者 西沢・本田・和仁古・田上・川端・藤本・池崎・丸尾・前田 (9名)

◇今西錦司先生記念碑完成披露会

日時 11月5日(土)～6日(日)

場所 京都市中京区河原町三条 京都ロイヤルホテル

内容 披露パーティ 18:30～20:30
京都支部の呼びかけで、元日本山岳会長今西錦司先生を追慕する記念碑(レリーフ)が、ゆかりの北山、直谷の奥に建立された。今西先生の、1500山登頂に関わりを持つ人が参集して披露会を開催、また碑前祭を行った。

碑前祭 折悪しく雨になったが、貴船神社奥の院より滝谷峠を經由して直谷の奥まで歩く。右岸の自然石に嵌め込まれたレリーフの前で缶ビールで乾杯、先生の愛唱歌を合唱。最後に今西コールと万歳三唱をして下山した。

出席者 西沢・本田 (130名)

◇平成6年度年次晩餐会

日時 12月3日(土)

場所 東京都 新高輪プリンスホテル

内容 支部長会議 13:00～14:00
晩餐会開宴まで、マッキンリー気象観測登山隊報告会、山岳写真展山岳書、グッズ即売、簡易バー開設などあり。

晩餐会 18:00～20:50

皇太子徳仁親王をはじめ、橋本龍太郎会員ら553名が出席して、例年通り盛会であった。また'95マカルー登山隊について、熊本支部の馬場博行会員ら13名の隊員の紹介があった。

出席者 本田・西沢・門脇・馬場(博) (553名)

◇新年晩餐会

日時 平成7年1月8日(日)18:00～20:00

場所 熊本市千歳城町4-25 熊本厚生年金会館

内容 遠来の石井さん、初めて天草から参加した長田さん、新入会の加藤さん、太田さんをはじめ22名が出席して盛会であった。長い間親しんできたホルン山小屋は、店舗改装のため会場を変更した。オーナーの宮崎豊喜会員には衷心から謝意を表

したい。20年来、山の花を撮り続けている広永会員から、美しい花の写真(カード)がプレゼントされた。

出席者 奥野・西沢・石井・本田・和仁古・田上・工藤・河上・川端・門脇・馬場(博)・宮崎(豊)・矢毛石・長田・中村(恵)・広永・後藤・丸尾・前田・出来田・加藤(功)・太田 (22名)

◇支部委員会

日時 2月5日(日) 18:00～20:00

場所 熊本市内坪井 ホルン山小屋

内容 馬場隊員の壮行会について
3月4日(土)18:00～熊本厚生年金会館
青年登山懇談会について
田上常任委員、工藤委員が出席する。

春季例会登山について

3月18日(土)～19日(日)藤河内溪谷より夏木山

出席者 本田・和仁古・田上・工藤・河上・中村 (6名)

◇第2回青年登山懇談会

平成7年度支部事務局担当者会議

日時 2月25日(土)～26日(日)

場所 東京都千代田区三崎町1-1-16
東京グリーンホテル水道橋

内容 2月25日 第2回青年登山懇親会 12:30～17:00
組織活性化について
懇親会 18:00～20:30
2月26日 支部事務局担当者会議 8:40～11:00
1. 創立90周年ブロック別記念式典について
2. 記念募金について
3. 平成7年度通常総会議案説明

出席者 工藤・田上

◇マカルー登山隊馬場博行隊員壮行会

日時 4月4日(土) 18:00～20:00

場所 熊本市千歳城町4-25 熊本厚生年金会館

内容 田上常任委員の司会で開会、先ず発起人を代表して本田支部長より挨拶あり、次いで遠路出席された吉村福岡支部長と、友人を代表して矢毛石会員から、登山の成功と馬場隊員の活躍を期待する激励の言葉が贈られた。これにたいし馬場隊員から謝意と決意表明があり和仁古副支部長の乾杯の音頭で開宴(立食パーティ)

出席者 馬場・本田・和仁古・西沢・田上・工藤・河上・門脇・吉田・広永・池崎・神谷夫妻
出来田・矢毛石・丸尾・加藤(功)・太田・前田・吉村(福岡支部長)・立石(電電山岳会顧問) (21名)

会 員 消 息

◎新入会員

加藤 功一 (11771) 1994.6入会
☎860-01 熊本県鹿本郡植木町一木360-2
☎096-272-5261 紹介者 馬場博行
太田 章雄 (11856) 1994.10入会
☎861-41 熊本市上ノ郷町124
☎096-355-2890 紹介者 池崎浩一

◎世界を舞台に登山

平成7年2月4日(土)熊本日日新聞 ふるさと人風土記より
泗水町住吉出身の工藤文昭(56)は、県立湧心館高校教諭で登山家。昭和45年のヨーロッパ遠征を皮切りに海外遠征10回。マッターホルン、キリマンジャロ、ヒマラヤなど世界六大州の高峰と北極点に立った。最後に残るのは南極。県山岳連盟の副理事長。菊池高一熊本商科大(現熊本学園大)

※これまで、この欄で紹介されたのは小国町の禿博信さん(故人)と、津奈木町の斉藤惇生さん(現京都支部長)のお二人である。

◎マカルー東稜登山隊

日本山岳会創立90周年記念マカルー登山隊の隊員に、かねてからマカルーに強い執念を持つ馬場博行さん(支部会員)が選ばれた。登山期間中に47才を迎える馬場さんは、隊員のなかでは最年長だが、マカルーに寄せる若々しい情熱と、日常のトレーニングで鍛えた体力、そしてヒマラヤでの豊富な登山経験などから十分な成果を期待したい。仕事の都合もあり、東京で開催された壮行会に、出席できなかった馬場さんを励ますため、本隊出発を控えた3月2日、NTTグループの関係者有志により、盛大な壮行会(NTT熊本会館)が開かれた。必要な資金も会社や労働組合、職場山岳会のカンパで集められたと聞いている。これは本人の日頃の精進と努力もあって、十分な理解と協力を得られたものと思う。

◎支部役員

支部長 本田 誠也
副支部長 和仁古 昇

常任委員 田上 敏行
委員 工藤 文昭 中村 恵二
河上 洋子 広吉 功
会計監事 樋口 格
支部顧問 奥野 正亥 西沢 健一

◎会員の現況

支部会員数 41名
支部会友数 6名
永年会員 1名(奥野 正亥)
終身会員 1名(馬場 猛)

後 記

私事で恐縮ですが、1983年に38年間のサラリーマン生活をリタイアしてサンデー毎日の結構な身分になりました。さて長い間中断していた山登りを再開しようと、張り切ったものの、いろいろと家庭の事情もあり、自分の時間が持てるようになったのは還暦を過ぎてからでした。山は逃げないというけれど、実感として、加齢とともに登れる山は逃げて行くのです。若い頃は職場で山岳会をつくって、ない金とない暇の都合をつけては、岩登り、縦走、積雪季登山に精を出していました。それも在職年数が長くなると、役付きになったりして余暇は極端に制限されました。そして退職後、暇だけはできたものの体力的には粘りが利かなくなり、里山歩きに毛が生えたようなピークハンターとしての山登りが多くなりました。それでも年に何回かは、お互いに相当ガタがきた古い山仲間を誘って北ア、南アや手近な海外の山に出掛けています。一昨年、京都の斉藤支部長からいただいた年賀状に「初秋誘われて鈴鹿の藤内壁、北アの錫杖岳で岩登りを久しぶりに楽しみました。新しい登山技術を教えてもらい心が躍りました」とありました。流石に8000mを、還暦をこえて登った人は心身ともに柔軟で若々しい情熱を持っていられると感心しました。及ばずとも見習いたい心境でいるところです。

(本田・記)

※カットは藤本多加志会員